コレンテ　vol. 35　n.285　　agosto　2014

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

私のイタリア留学記

『初めてのイタリア　～Firenze と Sardegna～②』

平木　奈々子

前回の＜フィレンツェ編＞に続き、今回は＜サルデーニャ編＞です。

1ヶ月の滞在の後半は、サルデーニャ島のバックパック一人旅。

最大の目的は、島最大のお祭り“セント・エフィジオ祭”です。聖人エフィジオをカリアリからノーラという町へ運ぶお祭り。そして島の人々は、自分の村の民族衣装を着てパレードします。元々、民族衣装を見て回りたいと考えていた私にとって、ピッタリすぎるお祭りでした。

サルデーニャ島は、イタリア半島から西へ約 188km、アフリカから北に約 180km に位置する、地中海で2番目に大きい四国ほどの面積の島。この島はイタリア本土との歴史的・地理的・文化的な差異が大きく、島独自の文化や伝統、習慣がたくさんあります（日本でいうと沖縄のような位置づけでしょうか）。私は特に、工芸や民族衣装、アート、島の人たちの暮らしに興味を持ち、サルデーニャ島を訪れることにしました。日本で島についての情報をいろいろ調べましたが、日本語の資料はほとんどなく、インターネットや SNS を活用して情報を集めました。また、サルデーニャ島では、イタリア語とは別にサルド語が使われているそうで、イタリア語もかなり訛りがあり言葉が通じるかもわからない、という情報もあり、不安もありましたが、せっかくイタリアまで来たのだから、と思い切って飛び込んでみることにしました。

インターネットや SNS は細かな情報を得るのにとても便利で、小さな工房や美術館に個人でも連絡を取ることができ、お勧めです。どんなスケジュールを立てようかと思案していましたが、気がつけば予定はいい具合に埋まっていました。

サルデーニャでのスケジュール

・サンタンティオコにて、伝統的な繊維“ビッソ”を継承されているマエストロ、キアラ・ヴィーゴさんを訪ねる
・カリアリにて、セント・エフィジオ祭を観る
・サムゲーオにて、民族衣装用の伝統的な生地を織っているマリオさんの工房を訪ねる
・ウラッサイにて、マリア・ライさんの美術館と機織り工房“ズ・マルムリ”を訪ねる
・ヌオーロにて、現代アートのギャラリーを訪ねる
・アルゲーロにて、パペットを作っているアーティストさんを訪ねる

“サンタンティオコ”へ

サルデーニャ島の初日。

早朝にカリアリ空港へ到着し、プルマンで最初の目的地“サンタンティオコ”へ向かいました。サルデーニャ島で初めてのプルマン。間違いがないように確認を重ねて乗車、2時間半バスに揺られ目的地へ到着しました。“サンタンティオコ”はサルデーニャ島に隣接する小さな島にあり、マグロ漁が盛んな町です。少し高台にある B&B の部屋からの眺めは最高でした。

早速キアラさんのところへ。“bisso(ビッソ)”というのは、ある種類の貝からのみ採ることができる繊維質の足糸から作られる糸で、ローマ法王が

儀式のときに着用する服などに使われる大変貴重なものなのだそうです。茶色っぽい色をしているのですが、光にあたると金色に光る不思議な糸。

【ビッソを説明するキアラさん】

古くから伝わる歌を歌いながら糸を紡いでいきます。実際に歌いながら糸紡ぐ作業を見せてくださいましたが、その歌がまるで呪文の様に聴こえて、絵本やおとぎ話の物語の中にいるかのような気分になりました。

最初に訪れた町“サンタンティオコ”で、私はすっかりサルデーニャの虜になってしまいました。

サンタンティオコでは、秋田犬を飼っているイタリア人の方に出会いました。日本人に出会ったら秋田犬を見せるのが夢だったんだ、と、わざわざ家に帰って2匹の秋田犬を連れて来てくれました。犬の名前はアイキとブンラク、秋田県大館市で生まれたのだそうです。私は、あまり東北についての知識がなく、「オーダテ、オーダテ」と言われてもピンと来ずにいると、携帯で日本地図を見せてくれて、大館市を指して「ここだよ」と教えてくれました。イタリアで秋田犬と戯れ、大館市の場所を教えてもらっているという状況がどうも面白くて、笑いが止まりませんでした。「なぜ秋田犬を選んだの？」と尋ねると、「最初はシェパードを飼う予定だったんだけど、たまたま秋田犬を見つけたんだ。人懐っこくてやさしい性格っていうのが気に入って秋田犬を飼うことにしたんだよ」、と教えてくれました。

日本の犬を気に入ってくれて、大切に飼ってくれていることを日本人として、とても嬉しく思いました。

カリアリ“セント・エフィジオ祭”

カリアリへ戻り、セント・エフィジオ祭へ。ホテルを出ると、通りでは大勢の民族衣装を着た人々のパレードが始まっていました。サルデーニャ島の民族衣装の興味深いところは、四国ほどの大きさの島の中に、沢山の種類の民族衣装が存在しているということ。カラフルなものや、真っ黒なもの、毛むくじゃらな衣装、白いレースの衣装 etc…様々です。祭りでは、村ごとにパレードに参加します。先頭を歩く人が村の名前が書かれた布を持ち、その後ろを村人が歩きます。小さな子供からおじいさん、おばあさんまで、いろんな世代の人が参加していて、途中で祝いの歌を歌ったり、民族楽器を演奏したり、足を鳴らしたり etc…自分の村に誇りをもちパレードしている姿がとても格好よく、なんだか少し羨ましく感じました。

【セント・エフィジオ祭】

サルデーニャでは、伝統的な祭りが各村々で盛んに行われていて、民族衣装を着る機会も多いのだそうです。民族衣装は、たくさんの手仕事

から作られるので、“民族衣装を着る機会が多いこと”もサルデーニャ島で手仕事や工芸が盛んな理由のひとつなのかもしれないな、と思いました。パレードは、かなり近距離から見ることができるので、衣装の細かい部分まで見ることができ、写真にも収められて、大満足でした。

“ウラッサイ”へ

ウラッサイという町は山の中にあります。町を歩いていると、出会うおばあさんたちは皆黒っぽい色の服。話しかけてみると、日常的に民族衣装（日常着用）を着ておられるのだそうです。私の目にはとても格好よく写り、「写真を撮らせてもらってもよいですか？」と尋ねると、おばあさんたちは口をそろえて「顔が悪いからだめよー」と、仰います。「えー！？きれいですよー」というと、「じゃぁ…」と遠慮がちにポーズをとってくれました。写真を撮り終えると、さっきまでの遠慮はどこへやら、写り具合をチェックしよう！と私のカメラを覗いてみんなでワイワイ（笑）みんな少女みたいでとてもキュートでした。

最終目的地“アルゲーロ”

アルゲーロという町はサルデーニャ島の北西に位置し、スペインの影響を強く受けている海沿いにある町。魚料理がとても美味しく赤サンゴが有名なところです。

ここには、ユニークなパペットを作っているアーティストさんがいらっしゃいます。たまたま SNS のサイトでそのパペットの写真を見て、そのユニークさにはまってしまい、アーティストさんとパペットに会いに行くことに決めたのでした。

実際にお会いし、パペットを見せてもらって、私は更に魅了されてしまいました。作業場にも案内してくれて、パペット作りの裏側も見せてもらい、忙しい中時間を作ってくれた彼らに感謝の気持ちでいっぱいでした。踏み込んだ話をもっとしたいのに、言いたいこと・聞きたいことをなかなか言葉にできず、もどかしく感じることも多々ありましたが、電子辞書や、翻訳サイト、イラストを描く etc… 皆でいろんな手段を駆使しコミュニケーションを取り合いました。話していると、国籍や環境なども違う中で生きてきているのに、考え方など共感できることが沢山あり、ずっと話をしていたいような気持ちになりました。サルデーニャの手仕事に興味がある、という話をすると、100 年前の古い機織り機で手織りの布を作っている陽気なおじさんがいるから紹介するよ、と、彼の工房へ案内してくれ、草木染めをしているところや、実際に機織りをしているところを見せてくれました。おじさんは、「僕は宮崎駿が大好きなんだよ。ハイジも駿の作品だね」、と話してくれました。私よりも宮崎駿さんのことに詳しい彼でした。（笑）

【機織りをしている Tonello さん】

彼らとは、日本に帰国した後も交流が続いています。近い将来、彼らと一緒になにか仕事ができたらいいな、と夢見ています。

あっという間のイタリアでの 1 ヶ月。たくさんの人に出会い温かさに触れ、たくさん助けられました。本当に素晴らしい経験ができたこと、会館の先生やスタッフさんのサポート etc.とても感謝しています。ありがとうございました。

文章が長くなってしまいましたが、最後までお読みいただきありがとうございました。

イタリア大好きです！ （イタリア語も！）

☆☆☆ Grazie a tutti ☆☆☆

（当館受講生）

＊カルヴィーノと アーティチョーク⑱＊

堤 康徳

マルキ・ド・サドの翻訳で知られるフランス文学者、澁澤龍彦（1927－87 年）は、古今東西の文学に精通した、たぐいまれな文筆家だった。異端的なイメージが先行しがちだが、該博な知識に裏打ちされたその文章は、明晰で、ときにユーモアに富み、軽妙な味わいがある。

じつはつい最近まで、私は澁澤の熱心な読者ではなかった。この連載を始めてからしばらくたった頃、私は偶然にも南イタリアをめぐる彼の紀行文を読み、目を奪われたのだった。まずその一節を引用しよう。

ローマからナポリまでは、ハイウェイに沿った両側の丘の斜面に、色も鮮やかな黄金色（こがねいろ）の金雀枝（えにしだ）が、密生して覆いかぶさるばかりに咲き乱れていたが、やがてベネヴェントを過ぎ、アペニン山脈を越える頃から、徐々に植物相（しょくぶつそう）が変わってくるのが私にも感じられた。カンパーニア地方からプーリア地方に入ったわけである。平野を真赤に染める雛罌粟（ひなげし）の群生は、すでにローマの近郊で私たちに親しいものとなっていたが、私が窓の外から初めて眺めたプーリア地方の植物相の特徴は、まずオリーヴ、仙人掌（さぼてん）、無花果（いちじく）、龍舌蘭（りゅうぜつらん）、夾竹桃（きょうちくとう）などといった、乾燥した土地に特有の南国的なものであった。（中略）

幹線道路から外れた埃っぽい田舎道に入ると、煉瓦を積んだ低い塀をめぐらした、蚕豆（そらまめ）の畑がある。葱坊主（ねぎぼうず）のような蕾をつけた、南欧人の好むアーティチョークの畑がある。（中略）

プーリア地方は、かねてから私の夢想していた土地、一度は足を踏み入れてみたいと考えていた土地である（「ペトラとフローラ――南イタリア紀行」（『イタリアの夢魔』角川春樹事務所、1998 年、pp. 14-15）。

澁澤が、南イタリアの風土にいかに魅せられていたかが伝わってくる文章だ。アーティチョークがまだ日本ではほとんど知られていなかった時代に、彼がこの野菜に注目したことにも驚かされる。

1974 年 5 月 19 日、澁澤龍彦と瀧子夫人は、長くローマに滞在していた美術史家の小川熙氏の運転する車で、「ローマから太陽道路を一路南下」して、プーリアに向かった。澁澤がこの地に赴いたのは、その独特の風土のためだけではなく、歴史的な関心に根差すものである。とりわけ、中世のシチリアに豊かな宮廷文化を築いた神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世を「怪物的な自由思想家」と呼んで並々ならぬ関心を寄せ、この皇帝が、シチリア王国の一部であったプーリアに建造した八角形の城、カステル・デル・モンテ訪問を、旅の主目的としているのだ。

澁澤のイタリア旅行には、書物をとおして興味を抱いた風景を、自らの眼で確認する目的もあったのだろう。たとえば、彼が大学卒業の翌年に翻訳刊行したジャン・コクトーの『大胯びらき』には、主人公の少年がマッジョーレ湖の湖畔にやってくるところがあるが、澁澤は初回のヨーロッパ旅行でさっそくこの地を訪れているのだ。1974 年のイタリア旅行の締めくくりにシチリアを選んだのも、おそらくは、ゲーテの『イタリア紀行』に誘発されてのことだったにちがいない。パレルモ滞在中にはヴィッラ・ジュリアにしばしば足を運び、廃園の様相を呈するこの公園で、かつてゲーテが観察したように、繁茂する植物の生命力に着目し、自然が人工物を呑みこむようすにみとれている。澁澤は「ペトラとフローラ――南イタリア紀行」に次のように書いている。

ゲーテがパレルモ滞在中、毎日のように通ってきては、「物静かな楽しい時間」を過ごし、彼の心に以前から漠然と浮かんでいた、あの「原形植物（ウールプランツェ）」という観念をつかんだのも、このヴ

ィッラ・ジュリアにおいてだったのである（同書、p. 33）。

さらに彼は、パレルモから東に 20 kmの距離にあるバゲリーアまで足を伸ばし、ゲーテが「パラゴニア式無軌道」と呼んで非難した、怪物庭園で知られるパラゴニア荘を見学している。

澁澤のイタリアへの興味は、ゲーテの『イタリア紀行』とともに、現代フランスの小説家アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグに負うところも大きい。澁澤は、マンディアルグの最初の長篇小説『大理石』（澁澤龍彦・高橋たか子訳、人文書院、1971年）を翻訳しているが、主人公が旧式な車でイタリアを放浪するこの作品は、イタリア幻想紀行ともいうべき趣きがあり、作者マンディアルグのイタリアへの偏愛ぶりが随所にうかがえる。澁澤も、「訳者あとがき」のなかで、イタリアが「作者の眷恋の土地である」と記している。

澁澤が初めてヨーロッパに旅立ったのは、1970年の夏の終わりだった。『イタリアの夢魔』に解説を付した巌谷國士氏によれば、当時は海外旅行がまだ珍しく、出発日には、多くの編集者や作家が羽田空港に見送りに来たが、そのなかには、「盾の会」の制服を着た三島由紀夫の姿もあったという。三島が自死する数ヶ月前のことである。

1970 年を皮切りに、1974 年、1977 年、1981 年の4度、澁澤はヨーロッパに遊んだ。イタリアに行ったのは、1977 年の 3 回目の旅行を除く 3 度。1974 年の 2 回目の旅では、南イタリアのみを訪れている。

いずれの旅も、瀧子夫人が同行した。夫妻のイタリア滞在については、澁澤龍彦・澁澤瀧子・小川熙著『澁澤龍彦のイタリア紀行』（新潮社、2007年）に詳しい。

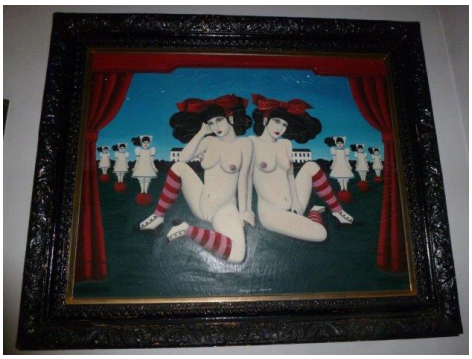
今年の 5 月 3 日、北鎌倉の澁澤邸を訪れ、瀧子夫人にお会いする機会があった。小学校からの友人でノンフィクション作家の秋山真志（『職業外伝』、『寄席の人たち』などの著作がある）が誘ってくれたのだ。かつて鎌倉の出版社に勤めていた秋山は、鎌倉在住の作家たちと親交を結び、瀧子夫人とも交流があった。

当日は、さわやかな五月晴れに恵まれ、空は抜けるように青かった。午後 3 時を過ぎた北鎌倉駅周辺は、連休中ではあったが観光客の姿もまばらだった。私と秋山は、まず浄智寺にある澁澤龍彦の墓に参り、花を供えた。山を背にした墓のたたずまいは、京都の法然院にある谷崎潤一郎の墓とどことなく似ているように思われた。

【澁澤龍彦の墓】

澁澤邸は、駅から歩いて数分の、狭い坂を昇ったところにあった。リビングの壁にはさまざまな絵画がかけられていた。四谷シモンの天使の人形もある。だが、とりわけ特異な存在感を放っていたのは、装幀家の菊池信義氏の描いた、天女のように鎮座する裸婦像だった。その絵はまるで、ゲーテの詩劇『ファウスト』第 2 部第 1 幕でメフィストフェレスが語る「母たちの国」の入り口のようでもあった。ウフィツィ美術館にあるピーコ・デッラ・ミランドラの肖像画の複製と、マルキ・ド・サド直筆の手紙も目にとまった。居間の奥の書斎には、地球儀の置かれたどっしりとした机があり、ぎっしりと本の並ぶ造り付けの書棚がぐるりと囲んでいた。そのなかに、デ・サンクティスの『イタリア文学史』があった。澁澤は、イタリアの歴史や古典文学にも造詣が深かったので、べつだん驚くにはあたらないが。

【ピーコ・デッラ・ミランドラの肖像画の複製】



【裸婦像】

【澁澤の書斎】

私が瀧子夫人と会うのは 2 回目だったが、おいしい手料理でもてなしていただいた。アーティチョークは食卓に並ばなかったが、食感が似ているタケノコ料理がふるまわれた。近所の山で夫人が採ったものだという。私は『澁澤龍彦のイタリア紀行』を持参し、イタリア旅行のことなどを夫人に尋ねた。イタリアには楽しい思い出しかないとのことだった。天使の人形が頭上にあり、髑髏(どくろ)などの珍しい置物が並ぶリビングで、ワインを飲み、料理に舌鼓を打ちながら、旅や文学や食について語り合い、あっという間に時間が過ぎた。夜もとっぷりと暮れた頃、私たちはすっかり愉快な気分になって澁澤邸を辞した。

【天使の人形】

最近私は、澁澤の「文字食う虫について」(『ドラコニア奇譚集』河出文庫、2007 年)という一文を読み、イタリアの古典文学を題材にした、その融通無碍で軽妙洒脱な文体にあらためて感心させられた。話の枕に使われているのは、タッソの『エルサレム解放』である。澁澤は昔からタッソがなんとなく好きで、龍彦とタッソの発音が似ていることから、Tasso と署名することもあったという。

五月の蒸し暑い日、薄暗い書庫で『エルサレム解放』の原書を開いた作者は、第 10 歌の第 63 節から 70 節までを読み始める。若く美しいイスラムの魔女アルミーダが呪文を唱えると、招宴の席にいた十字軍の騎士たちが水中に飛びこみ、魚に変身するくだりである。ところが、肝心な un pesce の文字が衣魚(しみ) に食われて読めないのである。作者は、タッソを食ったとおぼしき衣魚を虫眼鏡の下敷きして問いただす。そのやりとりもユーモラスだが、やはり、衣魚が食ったのが魚(pesce)という文字だったというアイデアがなんとも秀逸ではないか。

ここから作者は、古今東西の文学作品における人から魚への変身譚を簡単にたどったあと、自らが創作したこの衣魚の話が、『今昔物語集』巻 14 第 13 の「入道覚念、法花ヲ持して前世を知レルコト」なる説話にヒントを得たものであると種明かしをする。法華経の三行の文章がどうしてもおぼえられない入道が、じつは前世が衣魚であり、法華経のなかに巻きこめられてその三行を食ったことが原因だと、夢のなかに現れた高僧から聞かされる、という話である。

澁澤もまた、古今東西の文献を自由自在に行き来きしてその文字を食う、本の虫だったのではないだろうか。彼の読者は、頁にうがたれたその穴から、思いもよらぬ時空の旅に連れ出されるのである。

(上智大学講師)

編集・発行 /(公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL:(075)761-4356/FAX:(075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/